『Melody』

作　瀬多海人

■人物表

辻村神音《つじむらかのん》（18）
高校生・美琴の義姉

辻村美琴《つじむらみこと》（18）
高校生・神音の義妹

辻村雄喜《つじむらゆうき》（47）
神音の実父

辻村美子《つじむらよしこ》（50）
神音の実母

清田陽一《きよたよういち》（50）
辻村姉妹の担任

村岡昌子（むらおかまさこ）（28）
音楽教師・合唱部顧問

女子生徒1

女子生徒2

■あらすじ

音大志望の高校生、辻村神音。成績も優秀で、きっと音大にも難なく合格できるだろうと、周囲の誰もが思っていた。ただ一人、本人を除いて――。そんな神音の前に、両親を亡くした従弟の少女美琴が“妹”としてやってきてから、すべてが狂いはじめていた。美琴のもつ、目の前の相手が胸のうちに秘めた本音が声として聞こえてしまうという不思議な力。それを目の前にしたとき、神音は自分の歌に対する迷い――うまく歌うことはできるが、薄っぺらで空虚なものであるのではないか――という想いを、美琴に見抜かれてしまったと感じた。美琴もまた、周囲の声を拒むように、他者との接触を極力避けるような日々を送っていた。

そしてある日。美琴は周囲の声に耐えきれなくなり、自らこの世界を離れること――死を選ぶのだった。美琴が飛び降りる瞬間、神音は目の前でその光景を見ていながら、なに

もできなかった。むしろ、自分は美琴の死を望んでいたのかもしれないという想いが、神音を苦しめ続け、その日以来、学校にも行かず、歌うこともなくなっていた。

必死になって美琴の名前を出さないようにし、すべてがなかったことにしようとしている両親もまた神音にとっては不満だった。

自分を責める想いから、ついに神音も発作的に死を選ぼうとする。薄れてゆく意識の中で、神音は美琴と再会し、ようやくお互いの想いを腹蔵なく口にすることができたことで、許される。そして目覚めたベッドの上で、実は両親も美琴の死に責任を感じていたこと、悲しみに耐えていたことをようやく知ることができ、家族は新たな再生の道を歩み始める。

そして神音自身も、もう二度と美琴のような哀しい想いをする子がいないように、この世界には楽しい声だって、ちゃんと存在していることを証明するために、一度は捨てようとした歌の道を目指すのだった。

○廃ビル屋上（夕）

夕日を背に辻村美琴（18）が手すりの向こうに立ち、無表情にこちらを見ている。

美琴「ね。人はみんな、いつか幸せになれるのかな」

答えを尋ねるような素振りの後、首を横に振る美琴。

美琴「もう……私はなれないのかもしれないけどね。永遠に。……人はね、知らなくてもいいコトってホントはいっぱいあるんだよ。みんなは、彼氏が自分のコト、ホントに好きなのか、とか……先生が自分のコト、どう思ってるのか、とか……なんでも知りがるけど、いざ知ってしまうと悲しいことってたくさんあるんだよ。知らなければ悲しむこと、それだけ少なくなるんだから。他人の悲しみ、苦しみ、すべてきこえちゃうのに、誰のことも救うチカラなんてない。そんなの……こんなチカラ、欲しくなかっ

たのに、神様って残酷だと思わない？

……もう疲れちゃったよ」

美琴は哀しげに微笑む。

美琴「みんなの声に、耐えられないんだよ。もうなにも聴きたくないんだよ……わたし」

両手を翼のように広げる美琴。

美琴「（微笑んで）今度、生まれ変わるときは普通の女の子として出会えたら嬉しいな。普通に笑ったり、泣いたりできる女の子として……神音、そしたら今度はちゃんと、お姉ちゃんって呼んでくれるかな？」

ゆっくりと後ろに倒れてゆく美琴。

そして視界からその姿が消える。

○辻村家・神音の部屋・ドアの外

ドアのところに『かのんの部屋』と、女の子らしい飾りがかかっている。

ドアの向こう――突然部屋の中から、辻村神音（18）の叫び声がする。

神音「――――あっ！！」

○同・室内

息を荒げた神音が、汗をべっとりとかいた姿で、ベッドから半身だけ起こしている。

虚ろな表情で、枕元の時計を見る神音。

時計の針はすでに昼の十二時を僅かに回ろうとしている。

○辻村家・リビング内

ゆっくりと階段を降りる足音が聞える。

ドアが開き、パジャマ姿の神音が、けだるそうな表情で入ってくる。

奥のキッチンから辻村美子（50）がリビングに入ってくる。

美子「あら神音、起きてたの。何か食べる？」

それを無視してソファに座ると、テレビをつける神音。

美子「（笑顔で）……おなかすいてないの？

じゃ、すいたら冷蔵庫の中のもの、適当に温めて食べてね。母さん、これから出かけ

るから。あ、そうそう、ちょっと遅くなるかもしれないから、夕食は何か取って食べといてね」

無視するように、なおもぼんやりとテレビを見ている神音。

少し哀しげな表情をした後、慌ただしくリビングを出ていく美子。

ドアが閉まると同時に神音は顔を伏せ、つぶやく。

神音「なんで普通にしてられるのよ。なんで皆……なんで私が悪いって言わないの」

○同・リビング内（夕）

薄暗い室内。

電気もつけずにテレビの明かりの中で、神音がソファに座っている。

玄関でチャイムが鳴る。

動こうともしない神音。

再びチャイム。

なおも無視する神音。

三度目のチャイムは連呼される。

廊下で足音。

ドアが開き、清田陽一（50）が顔を出す。

清田「（軽く片手をあげて）よう」

神音「（目をテレビからそらさずに）不法侵入」

清田「あ、こりゃスマン。ただ、何度チャイムを鳴らしても返事がないし、玄関の鍵、開け放してのも不用心だと心配になってな」

あくまでも神音は清田と目を合わせようとせず、テレビの画面を見詰めている。

神音「心配して欲しい、なんて頼んでませんけど。だいたい、もう先生と私とは何の関係もないはずです」

清田「退学しても、俺の生徒には変わらんだろうが」

神音「迷惑です」

清田「そうか」

神音の隣にどっかりと腰を下ろす清田。

神音「聞えませんでしたか？」

清田「聞えた」

神音「なら……」

清田「音楽の村岡先生がな」

神音「……」

清田「村岡先生がな、残念がってたぞ。合唱部の部長だからってわけじゃない。贔屓目じゃなく、オマエはいい声を持ってるってさ」

神音「もう半年も前の話です」

清田「なに、すねてるんだ」

神音「すねてません」

清田「オマエらの歳の半年は、『もう』じゃなくて『たった』だ。まだ戻れる」

神音「……どこに」

鞄の中から封筒に入った書類の束を取り出し、テーブルの上に投げ出す清田。

清田「音大の願書だ」

神音「（初めて横の清田の顔を見て）……何の真似ですか。退学した生徒にこんなもの持ってきて」

清田「実はな、オマエの退学届、受理されてないんだわ。というか、オレが握り潰した」

神音「……勝手に」

清田「もちろんオマエの両親も承知のことだがな。今からちゃんと学校に出てくれば、卒業だってできるようオレが努力する。だから、黙って願書を出しとけ。〆切は三日後だからな、忘れるなよ」

神音「……」

清田「それとも……そんなに学校がイヤになったか。もしそうなら無理強いはしないが、このままオマエまで、どうにかなっちまうんじゃないかと心配なんだよ」

神音「……なんでそんな余計なこと、するんですか」

清田「余計なこと？」

神音「教師の仕事って、ただ教室で勉強教えてればいいだけじゃないんですか。それでお給料分、じゅうぶん働いてるでしょ。なんでお金にもならないのに私なんかに関わ

るんですか？

そんなの迷惑だって言った

はずです」

清田「……そっか」

ゆっくりと立ち上がる清田。

清田「オマエがそう言うなら。じゃ……帰る

わ。ただ、遠慮なくいつでも電話をくれや。

音大をどうするかはともかく、他のことで

も何でも相談くらいには乗るからさ。オマ

エはオレの生徒なんだから」

部屋を出ていく清田。

その背に向かってつぶやく神音。

神音「センセ……そんな、余計な優しさは、

かえって人を苦しめることだってあるんだ

よ。……まだ責めてくれた方が気が楽だよ」

ぎゅっと身体を丸め、縮こまる神音。

○同・リビング内（夜）

真っ暗な室内。

ドアが開き、美子が入ってくる。

美子、電気をつけ、ソファで縮こまって

いる神音の姿に驚く。

美子「ま、いたんじゃない。ちょっと、びっくりさせないでよ。どうしたの電気もつけないで」

美子、コートを脱ごうとして、

美子「……うう寒。もしかして暖房もつけないで、ずっとここにいたの？」

神音「なんで……」

美子「え？」

神音「なんでもあんなことしたのよ」

美子「あんなこと？」

神音「清田から聞いたよ」

美子「あら、清田先生来たの？」

テーブルの上に無造作に投げられた封筒を片づけようとして、音大の願書である

と気づく美子。

美子「願書……聞いたのね。退学届、出してないってこと」

神音「なんで余計なことするの」

美子「余計なことって……みんな、あなたの

為に……」

突然立ち上がり、テーブルの上にあったものを手当たり次第に美子に投げつける神音。

神音「それが余計なことだって！」

目に涙を溜めている神音。

神音「私の為？　ウソばっかり。そんなに家庭を守りたい？　壊れるのが恐い？　まるで最初からなにもなかったように、なんでそんな風に普通にできるの？」

美子「なによ、それ」

神音「美琴は死んだんだよ。もういないんだよ。なにもなかったように、前と同じようになんてできないよ！　なんでママは平気なわけ!?」

美子「平気って……そんなわけないじゃない。

美琴が死んでママだって、悲しいわよ」

神音「なら、なんで責めなかったの？　あのとき、屋上で、目の前で美琴が死ぬのを止めなかったんだよ、私。手を伸ばせば、届

く距離にいたのに！」

美子「そんなの、あなたのせいじゃ……」

神音「違う！　ずっと、心の中では美琴がいなくなればって……思ってたんだ。一年前、美琴がウチに来たときから……ずっと！」

灰皿を窓に向けて投げる神音。

激しい音とともにガラスが砕け散る。

○辻村家・玄関内・回想（夜）

ドアが開き、辻村雄喜（47）が入ってくる。その後ろに制服姿の美琴が無表情な顔を覗かせる。

雄喜「ただいまー」

奥から美子が小走りにやってくる。

美子「あら、おかえりなさい。美琴ちゃんね。しばらく見ないあいだに、おっきくなって」

無言で会釈する美琴。

雄喜「（苦笑しつつ）おっきくなったって、な。高校生に向かって、そりゃないだろ。神音と同い年なんだからさ」

美子「それはそうだけど。前に会ったのはまだ6歳だったわけでしょ。その頃と比べれば」

雄喜「ああ、わかった、わかった。そんなことより、飯、飯。美琴ちゃんだって、お腹すいてるだろうからさ」

美子「そうね。早速ご飯にしましょ。あら、美琴ちゃん、そんなに緊張しないでいいのよ。今日からここがあなたのウチになるんだから、遠慮なんかしないでね」

美子、奥に向かって、

美子「神音！　神音、なにやってんの。美琴ちゃんに挨拶もしないで」

○同・神音の部屋・室内・回想（夜）

ベッドに寝転がって天井を見つめている

神音。

神音（N）「自分でもこんなの、大人げないってわかってた。高校生にもなって、なにやってんの、って自分でも思ってた。それ

でも美琴が恐かった。正確に言うと、美琴の目が。最初に会ったのは六歳のとき。美琴の父親、つまりウチのパパの弟が勤務先のロスから久しぶりに帰国したとき。同い年の従兄弟だと紹介され、握った手が妙に冷たかったことを覚えてる。そしてなにより、無表情なのに、その心の奥底まで見通すような純粋無垢な目が恐かったのを子供ながらにハッキリと覚えている」

階段を昇る音がし、部屋のドアが開く。

ビクリとする神音。

美子が睨み付けるように入ってくる。

美子「なにやってんの。いるなら、返事くらいなさい」

神音「うん」

美子に背を向け、丸まる神音。

美子「なに、すねてるの」

神音「すねてなんかないよ」

美子「なら、美琴ちゃんにちゃんと挨拶なさい。これから一緒に暮らすんだから」

神音「ホントなんだ」

美子「え？」

神音「ホントにあの子、ウチで暮らすんだ」

美子「なにをいまさら。アンタにも前に言ったでしょ。あんなことになった上に身寄りはウチだけなんだもの、引き取るしかないじゃない。それとも路頭にでも迷わせたいわけ？」

神音「そういうわけじゃないけど……」

神音（N）「そう。アメリカで国内線が墜落して、その中に美琴の両親が乗っていたとニュースで言っていたのを覚えている。一緒に乗るはずだった彼女は、美琴は前日になって急に熱を出して寝込んだため、難を逃れたらしい」

神音「お姉ちゃん……か」

美子「そう。アンタが12月25日、美琴ちゃんが24日。たとえ一日でもあなたより早生まれなんだから、お姉ちゃんでしょ。慣れるまで大変かもしれないけど、うまくやって

よね。美琴ちゃんだって、両親を一度に亡くして、ホントは一番辛いだろうに涙さえ見せないでがんばってるんだから」

美子、部屋を出かけて、

美子「とにかくご飯食べちゃいなさい」

○同・食卓・回想（夜）

食卓を雄喜、美子、神音、美琴が囲んでいる。

しきりに雄喜と美子は美琴に話し掛ける

が、首を横か縦に振るかしかしない美琴。

押し黙ったまま黙々と食事を続ける神音。

神音（N）「ハッキリ言って、ほとんど苦行にも近い食卓だった。なにを話していいのか、なにを話し掛けられたのかも覚えていない。ただ早くこの場を離れたい。それだけの想いが箸を急かせていた」

○教室内・回想

黒板を前に清田が、美琴を紹介している。

頬杖をついてそれをながめている神音。

無表情の美琴と神音の目が会う。

慌てて目をそらす神音。

×

×

×

休み時間。美琴の机の周囲に女生徒たちが集まっている。

女生徒1「ねえ、美琴ってアメリカで長いこと、暮らしてたんだって？」

美琴「……うん」

女生徒2「すっごいじゃん。帰国子女ってヤッ？　じゃ、英語話せるんだ」

美琴「……ちょっとだけ」

女生徒1「ふーん。じゃあ、今度の英語の課題、美琴に頼んじゃおうかなあ」

美琴「課題は自分でやった方がいいと思う」

女生徒1「（真面目な表情になって）えっ？」

女生徒2「やっだー、冗談に決まってっじゃん」

美琴「……」

○高校・下駄箱前・回想・夕

下駄箱から上履きを取り出し、履く美琴。

わずかに顔をしかめ、上履きの中から画鋲を取り出す美琴。

何もなかったように教室に歩き出す美琴。

それをクスクスと笑ってみている女生徒の一団。

その一団を下駄箱の陰から冷ややかに見つめている神音。

○高校・正門前・回想（夕）

帰宅を急ぐ生徒達の集団が次々と正門から吐き出されていく。

正門横で神音が立っている。

美琴が出てくる。

神音「美琴」

黙って神音の横を通りすぎていく美琴。

神音「美琴！」

慌てて美琴のあとを追う神音。

神音「ちょっと待ちなさいよ」

美琴「（足も止めずに）なに？」

神音「あんなことされて、黙ってるわけ？」

美琴「あんなことって？」

神音「アンタ、クラスで除け者にされてるってわかってんの？」

美琴「だから？」

神音「だからって……一応姉妹なんだし」

美琴「そう」

立ち止まった美琴と目があい、息を呑む神音。

黙って歩いていく美琴を見送る神音。

神音「……なんなの、あれ」

神音の後ろから女生徒たちが現れる。

女生徒1「ね、神音。あの子、ずっとあんな感じなの？」

神音「さあ？　子供の頃から、変な子だったけど、両親死んじゃってから、特にね」

女生徒2「壊れちゃったんじゃないの？」

○教室内・回想

誰もいない教室。

たったひとり、美琴が机の中からボロボロに破かれた教科書を取り出している。

美琴「……！」

廊下からそれを見ている神音。

突然引きつけを起こしたように、うずくまる美琴。頭を抱えて、震えている。

美琴「イヤ……イヤ……もう……イヤなの」

神音「！？」

美琴「聴きたくないの……お願い……許して」

慌てて教室内に入ってくる神音。美琴を抱きかかえる。

神音「ちょっと、なに？　どうしたの？」

呆然とした表情で、宙を見つめ、つぶやいている美琴。

美琴「イヤ……もう……こんな声……聴きたくないの……ママ……パパ……ごめんなさい。美琴は悪い子でした。だから、もう……許して……」

○保健室・回想

ベッドで寝ている美琴。

その側に付き添っている神音。

神音「ねえ、さっきのあれ、なに？」

美琴「……」

神音「持病でもあるの？」

美琴「……」

神音「言わなきゃわかんないよ」

美琴「……聞こえるの。聴きたくないのに」

神音「なにが？」

美琴「恐いの。みんなの、恐い声が聞こえるの」

神音「……え？」

天井を見つめ、震えている美琴。

○辻村家・リビング内（夜）

真っ暗な室内。

あたりにものが散乱し、テーブルもひっくり返っている。

部屋の真ん中に神音だけがぽんやりと座

っている。

小さくつぶやく神音。

神音「ねえ、美琴。美琴にはきっと、私の中の恐い声も聞こえてたんだよね。美琴のこと、うざいって思ってる、恐い声が。だから――あんなことに」

ドアが開き、スーツ姿のままの雄喜が入ってくる。

雄喜「ただいま」

神音「……」

雄喜「神音、ただいま」

神音「……聞いたんでしょ」

雄喜「ああ」

神音「怒らないの？」

雄喜「ああ。だけど、オマエもずっと辛かったんだろうから……」

神音「パパはいつもそうだね。そうやってものわかりのいい父親やって。もう高校に行きたくないって言えば、ああ、そうかって。ウチの中、こんなにしてもなにひとつ言わ

ない。このウチ出て行きたいって言っても、

ああそうかって言いそうだよね」

雄喜「家を出てく？

冗談だろ」

神音「そういえば、パパにぶたれたことだって一度もないんだよね、私」

雄喜「パパは……暴力は嫌いだ。だいいち、

神音だって、もう子供じゃないんだ。言わなくても……」

神音「言わなくちゃ……言ってくれなきゃわかんないよ。都合のいいときだけ、大人扱いしないで欲しいよ。私、美琴のこと、殺したんだよ。それでも何も言わないの？」

雄喜「そんなこと言うな！」

神音を抱きしめる雄喜。

雄喜「そんなこと言わないでくれよ。殺した

だなんて、そんな悲しいこと言わないでくれよ。あれは自殺なんだ。オマエはどうしようもなかった」

神音「違う。美琴の死を望んだのは、きっと私なんだから。私なんだから……」

○音楽室内・回想（夕）

村岡昌子（28）がピアノを弾きつつ、それに合わせて神音が歌を歌っている。

しかし、神音の表情は浮かない。

昌子が途中でピアノの伴奏を止め、神音が何事か、という表情で顔をあげる。

神音「なにか……」

昌子「ううん。上手い。さすが合唱部部長。……と言いたいところなんだけど、なんか違う、かな」

昌子はつぶやいたあとに、慌てて否定するように手を振って、

昌子「あ、違う、違う。たぶん私の気のせい。さ、もう一度今のところから」

×

×

×

神音が一人、譜面を前に立ちすくんでいる。今にも泣き出しそうなくらい、思い詰めた表情。

その様子を音楽室の小窓から、じっと見つめている美琴。

美琴に見られていることに、ハッと気づいた神音が、勢いよく飛び出してゆく。

○音楽室前廊下・回想（夕）

いきおいよく音楽室から飛び出してくると、廊下の壁に美琴を押しつける神音。

神音「なによ、さっきの目。言いたいことがあるんなら、言えばいいじゃない！」

美琴「……痛い」

さらに強く壁に押しつける神音。

神音「私の歌になにか文句あるわけ？」

美琴「……わかってるくせに」

神音「ッ（ハッとして）」

美琴「神音の歌……楽しくない」

神音「ッ（激高）」

思わず、美琴を平手打ちする神音。

そのまま駆け出す神音を、ほほを真っ赤に腫らせたまま、微動だにせずに見つめ

ている美琴。

○辻村家・リビング内（夜）

回想から戻って。

抱きしめていた神音から身体を離し、神音を見詰める雄喜。

雄喜「……死を望んだなんて、なんでそんなことを言うんだ」

神音「ホントだよ。恐かった。恐かったんだよ。あの目がすべてを見通してるようで。唄だってそう。ホントは私の唄なんて、空っぽの張子みたいな唄だって、自分が一番よくわかってた。小さい頃は唄うことが、ただ唄をうたうこと自体が大好きだったのに、高校に入ってからは、合唱部の中で目立ちたくて、誰よりも誉められたくて、うまく唄うことしか考えてなくて……それを美琴の目は言ってたんだ。口ではハッキリ言わないけど、『アンタの唄は所詮、上っ面だけ。そしてアンタ自身も上っ面だけの

存在』だって。あの目が……」

嗚咽を漏らす神音。

神音「だから……だから……ホントはいなくなって、ホッとしてる自分がいるんだよ。そういう、イヤな自分がいるんだよ」

○同・神音の部屋（夜）

譜面を手に神音が立っている。

唄い出そうと、深く息を吸い込む神音。

だが、途中で何かが詰まったように声が出せない。

神音「……」

声を出そうとすればするほど、過呼吸のようになって、その場にうずくまる。

苛立ったように窓に向かって、譜面を投げつける神音。

やがてベッドに顔を伏して号泣する。

○同・神音の部屋（夜）

電気が消え、月明かりの中、神音がベッドの中、天井を見詰めている。

その手にはカッターナイフが握られている。

神音「（空ろな声で）ジングルベール、ジングルベール」

○道路（夜）

クリスマスのイルミネーションが輝く街の中、救急車がサイレンを鳴らして走っていく。

○病室（夜）

真っ青な顔をした神音が、病室のベッドに横たわっている。

その左手首には包帯が巻かれている。

ベッドの横では美子が心配そうに見守っている。

ドアが開き、雄喜が入ってくる。

美子「先生はどうだって？」

雄喜「一応、発見は早かったから、命に別状はないそうだが、しばらくは絶対安静だそうだ」

安堵の息をつく美子。

雄喜「神音のヤツ、どうしたっていうんだ。美琴のことで、責任を感じて……なんて、こんなことをする子だとは思わなかった。最近、なにか変わったところはなかったのか」

美子「最近？　ずっとよ。美琴があんなことになって、学校を辞めたいなんて言い出した頃から。娘の様子なんて、あなたは興味なかったかもしれないけど」

雄喜「興味がない？　そんなわけないだろ。だいたい、オマエはそんなこと一言も言わなかったじゃないか」

美子「あなたはいつも仕事、仕事って。たまに早く帰ったかと思えば、『ああ、疲れた。たまに早く帰ったときくらいゆっくり休ませてくれ』って」

雄喜「だからって、こんな状態になるまで！」

美子「ちょっと。大きな声出さないでよ。こ、病院なのよ」

雄喜「……」

美子「神音にもしものことがあったら……」

雄喜「おい。不吉なこと言うなよ」

美子「……別れましょ」

雄喜「こんなときに」

美子「こんなときだからよ。いい加減、もううんざりなのよ。ウチに帰ってくればろくに会話もなく寝るだけ。休日は休日でゴルフって……これが家族？」

雄喜「しかたないだろ」

美子「しかたない？　しかたない、の結果がこれよ」

雄喜「それとこれとは……」

美子「神音がこんなに悩んでたこと、あなたわかってた？　知らなかったでしょ。うん。神音だけじゃない。自分が引き取るって決めたくせに美琴だって、すべて私に任

せっきりで」

雄喜「それはオマエだって、ふたりが悩んでたこと、知らなかっただろうが。だいたい母親なら娘のこと、もう少し気を遣ってやったら……」

美子「父親は娘のこと、気を遣わなくてもいいの？」

雄喜「誰もそんなこと、言ってないだろ」

○神音の夢の中

真っ暗な道を神音が歩いている。

足音だけがあたりに響いている。

神音「私……死んだのかな」

美琴の声がする。

美琴「神音はまだ来ちゃダメだよ」

神音「美琴……なの？

じゃ、やっぱり死んだんだね、私も」

ぼんやりと美琴の姿が神音の目の前に現れる。

神音「……ゴメンね」

にっこりと微笑む美琴。

美琴「もういいよ」

神音「よくないよ」

美琴「いい」

神音「よくない！」

美琴「いいって言ってるでしょ」

神音「よくないって言ってる！」

美琴「考えてみればこれが初めての姉妹ケンカだね」

神音「……」

美琴「そんなに落ち込まないでよ。神音のせいでもなんでもなく、ただ私が弱かっただけ」

神音「違う。美琴は弱くなんかないよ。小さい頃からずっと他人の悲しみを自分のように感じられる子で……パパやママまで亡くして……それなのに私は……そんな美琴のこと……」

美琴「もういいんだ。ただ、恐かっただけな

んだ。自分のチカラが。だから、心を開くこと、できなかったんだ。これ以上、悲しみや苦しみを感じたくなくて。でもね、そのせいで気づかなかったんだよ」

神音「なにを？」

美琴「苦しいときは、誰かに苦しいって言えばよかったんだよ。泣けばよかったんだよ。それなのに私は、悲しみに押しつぶされないようにただ頑丈な殻の中に閉じこもることだけ考えて……こんなこと言っても、もう遅いけどね」

自嘲気味に微笑む美琴。

神音「でも、それを私、感じ取れなくて……ううん、感じ取ってたはずなのに、美琴の悲しみを……」

美琴「神音は、何様のつもり？」

神音「（呆気に取られて）え？」

美琴「そんなこと、最初から神音に求めてなんかいないよ、私。人間は神様なんかになれないんだよ。言葉にしなくちゃ、誰もホ

ントにわかってなんかくれない。わかった気になってるだけ。今の神音だって、わかった気になって、自分を責めて自己満足してるだけだよ」

神音「そんなこと……」

美琴「違うって言い切れる？

神音はさ、パパに言ったよね。『言ってくれなきゃわからない』って。同じことだよ。言葉にしなきゃ誰もホントにはわかってくれないんだよ。私も神音も素直に自分は苦しいんです、って言えなかった。ううん。神音はまだ言えるじゃない」

神音「……もういいよ。私、美琴のところに行きたい。私も疲れたよ」

美琴「勝手なこと言わないでよ！

さっきも言ったけど、アンタいったい何様のつもり？

私に比べれば、アンタの苦しみや悲しみなんて、ほんの些細なものでしょ。たったひとりぶんの荷物なんだから。その程度の荷物背負ったくらいで、私と同じところ

に来ようなんて思わないで欲しいわ。だいたい、神音はまだ泣き言言える相手がいるじゃない。腕の中で泣ける相手がいるじゃない！」

○病室（早朝）

鳥の泣き声が聞える。

カーテンの隙間から日が射し込んでいる。

床に寝転んでいる雄喜と美子。

神音の目が開く。

神音「う、ううん……」

神音の声に美子が目を覚ます。

美子「……神音？」

神音「マ……マ？」

美子「気がついたのね！

良かったぁ。いつになっても目を醒まさないから……お医者様は麻酔が効いてるだけって言ったけど、心配で、心配で……」

一気にまくしたてた後に、ようやくハッとして、

美子「あなた、あなた！」

雄喜を揺さぶる美子。

雄喜「な、なんだよ……ハッ、神音になにかあったのか!?」

慌てて立ち上がる雄喜。

美子「縁起でもないこと言わないでよ。気がついたのよ、神音が」

神音にすがりついて泣き始める美子。

神音「（少し顔をしかめて）い、痛いよ……マ

マ」

雄喜「よかった、よかった」

涙を流す雄喜。

それを見て、神音はクスリと笑う。

神音「なんか久しぶりだよ」

雄喜「なにが」

神音「ママとパパがそんなに泣いてるの」

雄喜「誰が泣かせたと思ってる！　どんなに

パパとママが心配したと……」

神音「パパ、ホンキで怒ってる？」

雄喜「当たり前だ！」

神音「ちょっと嬉しい……かな」

雄喜「親をこんなに心配させといて、嬉しいだ？　神音、オマエって娘は！」

拳を振り上げる雄喜だが、その拳に気づき、慌てて下ろす。

神音「（涙ぐんで）初めてでしょ。そんなにホンキで怒ってくれたのって」

雄喜「まったく。その前に言うことがあるだろ」

神音「……」

雄喜「どうした。言えないのか」

神音「心配かけてゴメンなさい」

美子「よかった。よかったわ。もうひとり、娘を亡くすことになったら、もうママ、生きていられなかったわよ」

神音「（小さくつぶやくように）……そっか。死ぬほど苦しんでたのって、私だけじゃなかったんだ」

○廃ビル屋上（昼）

神音（N）「あれからちょっとだけ、ウチの家族は変わり始めました。まだぎこちなくて、言いたいこと、ホントに言い合えてるのか、自信はないけど、それでもパパとママが時々ケンカをするのも前にはなかったことで、なんかいいカンジです。こんなのって、なんか変かな？　でもケンカをするほど仲がいいって言うし。ただ、家庭サービスっていうのかな、そういうのにパパは目覚めちゃったらしく、私が元気になったら温泉に行こうだとか、海外旅行しようだとか、山ほどパンフレットを持って帰ってくるのは、ちょっとウザイ……かな。贅沢な悩みなんだろうけど」

屋上の錆付いた手すりのところに、小さな花束が手向けられている。

そして神音がしゃがみ、手を合わせている。

後ろから清田の声がかかる。

清田「またバカなこと、考えてるんじゃない

だろうな」

神音「（振り返って）冗談」

清田「よっ」

神音「センセ、よくここがわかったね」

清田「オマエんちに寄ったらな、ここだって聞いたんで、慌てて走ってきた」

神音「信用ないんだ」

清田「前科モンだからな」

神音「酷いな」

清田「酷いのはどっちだ。クラスの連中だって、心配してたぞ。さすがに事情が事情だ、お見舞いに行きたいってのは止めといたがな」

神音「一応、心配してくれたんだ、先生も」

清田「（恐い顔で）バカ。生徒のことを心配しない教師がいるか」

神音「出来損ないの生徒でも？」

清田「変わったな、オマエ」

神音「そう……かな」

清田「前よりちょっと肩から力が抜けた。前

はな、一分の隙もない面白味のないガキだったぞ、オマエ」

神音「（恐る恐る）美琴みたいに？」

清田「……」

神音「ゴメンなさい」

清田「いや……オレの方こそ、ちゃんと謝っておかなきゃな。美琴のこと、救えなかったのはオレの責任でもある。そのせいで、オマエまでこんなことに……」

神音「そんなことないよ。悪いのは皆、私なんだから……私が美琴にもっと素直に接してれば……あんなことには。今回のことだって、私が素直になれなかったせいなんだよ」

清田「あんまり自分のこと、責めるなよ。オマエのお母さんから聞いたぞ。自分のこと責めたってキリがない」

神音「わかってる。人間なんて完璧にはなれないんだよね。でも……べつに自分を責めてるわけじゃなくて、美琴は今の私には大

事な存在だから……」

清田「……そっか。だけど、自分の中であんまり溜め込むんじゃないぞ」

神音「心配？」

清田「心配だ。もし泣きたきゃ、ウチに来い。先生が胸貸してやる。愚痴を言いたきゃ聞いてやる」

神音「モテないオジサンの胸なんかいらない」

清田「オジサンで悪かったな。これでもメタボ気味の身体は、ぼよんぼよんで気持ちいいぞ？」

神音「でも、同じだね」

清田「同じ？」

神音「病院で眠ってたとき、夢の中で、美琴も同じようなこと言ってたんだよ。悲しいときは大声で泣いて、悲しいって訴えればいいって。苦しいときは助けて、って大声で叫べばいいって」

×

×

×

屋上の端で並んで遠くを見ている神音と

清田。

清田「な、やっぱりもう音大進むの諦めちまうのか？　今年はもう願書の〆切終わっちまったけど」

神音「ゴメンなさい。イロイロしてもらったのに、結局……」

清田「ま、オマエの人生だ。いまさらどうこうオレが言うつもりもないんだけどな」

神音「でも、来年は受けようと思います。ちゃんと」

清田「受けるって……音大か？」

神音「他にどこがあります？」

清田「（神音の背を叩きながら）そっか、そっか」

神音「い、痛いですよ。これでも病み上がりなんだから」

清田「スマン、スマン。でも、嬉しいからさ」

神音「ただ……」

清田「ただ？」

神音「不安」

清田「なにが不安だ。実技ならオマエの普段の実力さえ出せば……ははあん。筆記か。安心しろ。補習でもなんでもやってやる」

神音「（ポツリと）唄……唄えるかな」

清田「は？」

神音「自分でわかってるんです。自分の唄、ずっと空っぽだったって。ただキレイに唄ってるだけだって。唄ってもホントに唄ってるって感じじゃないんです。ただ文字を音階どうりに発声しているだけ」

清田「……先生はさ、そーいうのわかんないけどさ、最初っから空っぽだったわけじゃないんだろ」

神音「……たぶん」

清田「じゃ、その無くしたもの、また見つければいいんじゃないのか？」

神音「簡単に言いますね」

清田「オレは音楽の教師じゃないからな、そ

の辺、気楽だ」

ガハハと笑う清田。

○人通りのない道（夜）

清田と神音が並んで歩いている。

清田「さっきの話だけどさ」

神音「はい？」

清田「オマエの唄は空っぽだって話」

神音「もういいです。自分で解決するしかないですから」

清田「ほら、またそうやって自分で背負い込む」

神音「……」

清田「ま、いいけどな。言霊って知ってるか」

神音「大昔に言葉がもっていると信じられた神秘的な霊力……ですよね」

清田「ああ。たぶん唄えるぞ、オマエ」

神音「……はい？」

清田「べつに根拠があるわけじゃないけどな、オマエがさっき言ってたろ」

神音「意味がよくわからないんですけど」

清田「悲しいときは大声で泣いて、悲しいって訴えればいいって。苦しいときは助けて、って大声で叫べばいいって、言ったろ。それって言霊なんじゃないかな。悲しいって感情はさ、言葉で『悲しい』って口に出して言って始めて、悲しいって言霊を持つんだよ。そうじゃなきゃ、人の感情なんて誰にも伝わらないだろ。言霊が他人に想いを伝えるんだよ」

立ち止まり、清田の顔を覗き込む神音。

神音「センセ、たしか数学の教師……ですよね？」

清田「だからなんだ」

神音「数学の教師がそんなこと言うのって、なーんか変だな、って。言霊なんて非科学的なことを。国語の先生が言うなら、まだわかるんだけど」

清田「数学の教師だって、すべて数字で計れると思ってるわけじゃないからな。この世

のすべては確率で動いてるとかさ、いくら

なんでも思っちゃいない。ことに心だとか

感情って問題は、そんなもんじゃ推し量れ

んよ。ま、神音は、悲しいときは素直に『

悲しい』って言えるようになったんだろ」

神音「わかんない……けど、前よりは話すよ

うに努力してます」

清田「それでいいんだよ」

神音「……？」

清田「ただその唄を感じたまま、素直に唄え

ばそこには言霊が宿るんじゃないかな、っ

てな。それがオマエの言ってた『空っぽ』

ってのを埋めてくれるんじゃないのか」

神音「先生……」

清田「ん？」

神音「意外に詩人なんですね？」

清田「は？　詩人？」

照れる清田。

駆け出す神音。

途中で、振り返り、

神音「今日はありがとうございました！　な
んだか、ちょっとだけ唄えそうな気がしま
す…」

再び前を向いて走り出す神音。

○辻村家・神音の部屋（夜）

譜面を手にした神音が、堅い表情で立っている。

深呼吸。

すると、神音の表情が軟らかくなる。

もう一度深く深呼吸をして、歌い出そう
とする――。

○聖徳音楽大学・大講堂・外観

桜が舞い散る道。

着物や正装姿の女子大生があちこちで話
をしている。

講堂の入口には『聖徳音楽大学・第52回
卒業式』の看板。

○聖徳音楽大学・大講堂内

ずらっと並んだ来賓、父兄の列。

壇上にはひな壇が作られ、卒業生が並んでいる。

アナウンス「それでは次に卒業生による卒業発表に移らせていただきます。まずは卒業生総代として、声楽科四年、辻村神音さんが来賓の皆様へのご挨拶をさせていただきます」

ステージ横の裾から、23歳となった袴姿の神音がゆっくりと中央へと進み出る。

中央で来賓席の左右を見渡し、軽く深呼吸をする神音。

そして一礼。

アナウンス「辻村さんは本学を創設以来の優秀な成績で卒業し、この後、オーストリアのウィーンへの音楽留学が決定致しております」

あたりを拍手が包み込む。

神音「私には高校生のとき、大切な人がいま

した。でも私は彼女が亡くなるまで、その人の悲しみに気づいてあげられませんでした。そう。彼女の表面だけを見て、その本当の奥にある悲しみに気づいてあげられなかったんです」

あたりが水を打ったように静かになる。

神音「そんな人間に本当に人を感動させる唄が唄えるでしょうか？

……いえ、実際、唄えませんでした。私の唄は表面だけの薄っぺらいものだったんです。でも……でもそれを彼女が気づかせてくれたんです。今なら本当の唄が唄えると思っています。彼女に届く唄が」

前奏が始まり、神音の歌声が響き始める。

神音「美琴……聴いててくれるよね。きっとどこかで」

講堂の隅に美琴の姿。

神音と目が合い、互いに微笑む。

○聖徳音楽大学・大講堂内（昼）

曲が終わり、満場の拍手の中、神音は一礼して壇上を降りて行く。

○聖徳音楽大学・大講堂内

後片付けの始まった講堂内。

後片付けの作業をする人間以外、ほとんどの来賓が帰っていく中、神音が美琴を見かけた場所へと走っていく。

神音「聴いてくれたよね。見てくれたよね、美琴。美琴の分まで立派に唄えたよね。……あれ？」

美琴のいた場所、あたりを見回すが、すでに誰の姿もない。

通りかかった作業の人間に話し掛ける神音。

神音「あ、あの……ここに制服を着た高校生が……」

作業の人間「はあ？」

神音「あ……すいません。結構です」

○聖徳音楽大学・大講堂入口

とぼとぼと出てくる神音。

晴れ渡った空を見上げて、

神音「（少し寂しそうに）そうだよね。美琴がいるわけないんだよね。……死んじゃったんだから」

零れ落ちそうになる涙を拭く神音。

神音「でも、きっと聴いてはくれたよね。どこかで……」

神音を呼ぶ美琴の声がする。

美琴「神音！」

神音「美琴？」

声のした方に振り向くと、両親が手を振っている。

神音「気のせい……かな」

○人込みの道路（夕）

卒業式帰りの着飾った人々で込み合っている。

神音は両親と三人歩いている。

美子「神音。せっかくだし、帰りに何かおいしいものでも食べていこうか。ね、あなたもいいでしょ」

雄喜「ああ。留学したらしばらくは会えなくなるんだしな」

神音「大丈夫？」

雄喜「なにが」

神音「私がいない間、夫婦二人きりなんだからさ、仲良くしなきゃダメだよ」

雄喜「こいつ。一人前の口をきくようになって」

美子「でも、ホントにひとりで大丈夫？　向こうは寒いんじゃないの？　寂しくなったらすぐに帰ってらっしゃい」

神音「そんな、行く前から帰ることなんて言わないでよ」

美子「でも、心配なのよ」

雄喜「（美子の肩を叩きながら）大丈夫。この子なら、なにがあってもひとりで乗り切れるよ」

神音「そう。でもね……いつでも、ひとりじゃないよ」

雄喜・美子「そうか」

神音「それから……」

足を止める神音。

神音「卒業の報告をしなきゃいけない人がいるから、先に行ってて」

駆け出し始め、途中で振り返る神音。

神音「そうだな、エンパイアホテルのイタリアン、美味しいんだって。だから、そこのロビーで待ってて！」

再び駆け出す神音。

残される雄喜と美子。

雄喜「二人っきり……だな」

美子「ええ」

雄喜「寂しくなるな」

美子「ええ。でも……あの子は、手が届かないところに行ってしまうわけじゃないし、オーストリアなんて同じ地球の上じゃないですか」

雄喜「さっきとはえらい違いじゃないか」

美子「二人っきりもちょっとだけいいかな、なんて思っただけですよ」

雄喜「歩こうか」

美子「ええ。歩きましょう」

雄喜「ゆっくりと」

美子「ゆっくりね」

腕を組んで歩き始める雄喜と美子。

○墓地・美琴の墓の前（夕）

墓に向かって拝んでいる神音。

神音「しばらくお参りに来れないけど、許してね。離れてても、美琴の心とはずっと一緒だから」

背後から美琴の声がする。

美琴「ありがと」

驚いて振り返る神音。

そこには高校生のままの美琴が立っている。

美琴「卒業おめでとう」

神音「……ありがと」

ボロボロと涙が零れ落ちる神音。

美琴「なんで泣くの。おめでたい日なのに」

神音「だって……私ばっかり幸せになっちゃって……美琴は……」

美琴「そんなことで、泣かないの。せっかくきれいにメイクしたのに、みんな落ちちゃうよ」

子供のように泣きじゃくる神音。

神音「だって、だって……」

美琴「（微笑んで）私は幸せだよ」

神音「ウソつき」

美琴「ウソじゃないって」

神音「私を安心させようと思って言ってるだけでしょ」

美琴「違うよ。だって、神音の唄、聴けて嬉しかったもん。この世界には、悲しみや苦しみだけじゃなく、神音の唄みたいに慈愛に満ちた想いがあるって感じられたから。恐い声ばかりじゃないってわかったから。

それは幸せだよ」

神音「……ホント？」

美琴「ホントだよ。幽霊はウソつかないもの」

神音「クス」

鼻をすすりあげる神音。

神音「……本当はもっと早く気づかせてあげられたらよかったね。世の中には恐い声ばかりじゃないってこと……私がもっとうまく歌えてたら……」

美琴「……もういいよ。私ももっと早く気づくべきだったんだ。恐い声に心を閉ざすんじゃなくて、神音の歌みたいな声を探せば良かったんだってことを」

神音「じゃ、私、いつまでも唄い続けるよ。すこしでも悲しみや苦しみを癒せるように。この世界には悲しいことがたくさんあって、それはなくなりはしないかもしれないけど、それでも少しでも……楽しいこと、嬉しいことがあるんだって伝えるために……」

うなずく美琴。

美琴「さ。もう行かなくちゃ」

神音「うん」

背を向けて歩き出す美琴。

数歩行って立ち止まり、振り返る。

美琴「（はにかんだように）あのね……最後に

お姉ちゃんって呼んでくれないかな」

神音「……え？」

美琴「その……一度も呼んでくれなかったから……」

うなずく神音。

神音「お姉ちゃん。……またね」

美琴「たった一日だけのお姉ちゃんだけどね」

○空港・滑走路（昼）

旅客機がゆっくりと滑走を始め、飛び立っていく。

○ターミナル内（昼）

飛んでいく旅客機を肩を組んで見送る雄

喜と美子。

○旅客機の中（昼）

窓から下界を見下ろしている神音。

神音「ちょっとの間だけ、さよなら。私の大好きな人たち。次に会うときには、今よりもうちょっとだけ大人になって帰ってきます。進むリズムはゆっくりかもしれないけど、また悩むこともたくさんあるかもしれないけど、それでももう奏でることは止めません。きっと素晴らしい音楽を奏でてみせます。それまで、楽しみにしていてください」

○人通りのない道（夕）

夕日を背に雄喜と美子が、腕を組んで歩いてゆく。

暮れ始めた空には飛行機雲。

（了）